



Title	死海写本をめぐる二、三の話題
Author(s)	山崎, 保興
Citation	基督教学, 34, 17-20
Issue Date	1999-06-30
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/46606">http://hdl.handle.net/2115/46606</a>
Type	article
File Information	34_17-20.pdf



[Instructions for use](#)

# 死海写本をめぐる二、三の 話題

山崎 保興

始めに「死海写本」という初期の呼称は（必ずしも写本だけではないという理由で）昨今では専ら「死海文書」と呼ばれているが、筆者は若年の頃からの慣行でこの呼称を用いることにした。そもそもはエレアザル・スケニークの「塩・海の巻物」との命名に由来する。それが欧米人の慣用で「死海の巻物」となり、更には「死海写本（文書）」となった。以下発表当日に掲げた項目の順序に従い、それぞれ簡単なコメントを記しておきたい。

## 一、スキヤンダル

いったいスキヤンダルとは何を言うのか、要するに死

海写本の公開が異常に遅れてしまったことが事の原因であるが、当初第一洞穴から発見された七巻の巻物は一九五三年までに活字に転記・翻訳され、ヨルダン政府から委嘱された国際編集チーム（代表者ローランド・ヴォー）は D・J・D (Discoveries of the Juden Desert) シリーズを次々と公刊、第五巻（一九七三）までは順調に進んだが、一九七一年ド・ヴォー死後作業は遅滞し始める。

そもそも第一洞穴発見以来ヨルダン・イスラエル間の競合は激しく、折から第一次中東戦争勃発、ド・ヴォーは当初からイスラエルの介入に反撥してユダヤ人学者を排除、と言うよりも国際チームは専ら彼の息のかかったドミニコ会系のエコール・ド・ビブリク（東エルサレム）のメンバーを主体としていたから当然のことであったが、問題は主として第四洞穴出土のいわゆる 4QMMT に関わる。これは元来巻物の体を為さない断片群であるから、その整理・解読には非常に手数も時間もかかることは当然であるが、それがあまりに長年月となると次第に物議をかもすことになる。一九七七年写本発見三十周年の頃から批判の声が上り始め、一九八五年以後 B A

R (Biblical Archaeology Review) 編集長ハーシエル・ジャンクスが大々的なキャンペーンを開始してから事柄は一挙に世界的に拡大した。この間イガエル・ヤデインが単独で「神殿の巻物」を公刊した(一九七七)こともあって4QMMTの遅れがいつそう喧伝されることとなった。担当チームの長ジョン・ストラグネルの不用意な言動が事態の悪化に拍車をかけ、一九九〇年その反ユダヤ的発言を機として辞任に追い込まれる。この頃から漸くイスラエル当局が主導権を握り、新任考古局長アミール・ドロリーがチームのメンバーを一挙に五三名に増員して作業の促進を図り、一九九四年に至って4QMMTを含むD・J・Dの第十巻が公刊され、騒ぎはひとまず一段落したのであった。

## 二、4QMMT

その問題のMMT(ミクツオット・マアセー・ハトラー)は漸く一九八四年に全一四行の内六行分だけが公表されたが、まことに大山鳴動ねずみ一匹の感があった。一九九一年になってハーシエル・ジャンクスは第四

洞穴からの未発表文書を『未発表死海文書の試作版』として出版したが、実はこれはヒブル・ユニオン・カレッツジのB・ヴァホルダーとM・アベッグが、以前に国際チームが作製していたコンコーダンスに基づいてコンピュータを駆使して全文を再構成したもので、後に直接本文解読のために労苦して来たエリシャ・キムロンの提訴によりイスラエル高裁から賠償判決を受ける破目になる。ともあれこれら様々な四囲の状況に押され、国際チームも遂に4QMMTの全容を明らかにした(一九九四年)。この「トラーに属する幾つかの規則」は本質的にクムラン宗団の基盤文書と見なされ、内容は暦・規則・結語と三つの部分から成る。紙数の関係から詳細は省略するが、ここからクムラン宗団サドカイ説も登場する(MMTの法規とミシュナー、タルムード等ラビ文献と比較、そこからサドカイの傾向を見出すことによって)ことになる。

## 三、神殿写本

最後にいわゆる「神殿写本」について若干のことを記

して終わりたい。「神殿の巻物（メギラット・ハミクダツシユ）」はイガエル・ヤデインの命名による。かつて「塩の海の巻物」が父エレアザル・スケニークの命名であったように。親子二代にわたる巻物との因縁は深く、それだけで優に一つの長編物語が書ける程のものがあるが、終始ベツレヘムの古物商カントーの影がつきまといることだけを記すに止めたい。とは言え、その背後に第二次大戦直後の中東情勢、第一次・第三次中東戦争、そしてヤデインがかつてのハガナの参謀将校としてその都度の状況判断において勝れて明敏であった事等を記憶に留めないわけには行かない。それがなければ今日エルサレムの写本館に保存・展示されている巻物群は、少なくともイスラエルの国有財産とはなっていないかつたはずであるから。さて前二項に記したような状況を後目にヤデインは単独作業を進め、早くも一九七七年に『神殿の巻物』を公刊した。実は筆者は七五年から七六年にかけてエルサレムにいたのだが、残念ながらこの大著を見ることなく帰国した。この時の受け入れ責任者が当時のヘブライ大学考古学研究所長ヤデイン教授であったので、

筆者は比較的近しく接することが出来たのであるが、その辺の消息は以前本誌上にも記したことがあるので差し控えたい。この間ヤデインの資料独占状態に対する非難があることを耳にしたこともあるが、事の経緯と写本をめぐる四囲の情勢から、さ程不当な事とは感じられなかった。後にある国際会議の席上彼が自らの業績に対する周辺の評価が冷たいことについて不満を述べたことをB A R誌上で読んでいささか憮然とした記憶があるが、霧囲気としては分からぬでもなかった。さらに数年を経て一九八三年公刊の英語版を漸く入手したが、それは直前ヤデイン先生の訃報に接したばかりの時であった。原本を手に入れたのはずっと後、一九九〇年夏イラクのクウェート侵攻直後の緊張をはらむエルサレムに赴き、直接イスラエル発掘協会へ行って全三巻を購入帰国したのであったが、後で聞けばこの時獨協大学高橋正男教授も滞在中であった由。同氏は既に早く一九九〇年七月時事通信社より発刊の『旧約聖書の世界——アブラハムから死海文書まで——』においてかなり詳しく「神殿の巻物」の紹介をされ、さらに九八年一月講談社から『死海文書』

を出して、より詳細に内容を紹介、また獨協大学研究紀要において（一九九三年九月）ヤデインの復原テキストに基づく試訳を発表、筆者の知る限り本邦における当該研究の第一人者と目される。前記『死海文書』は関連諸問題を網羅しつつ極めて簡潔に要点を整理した勝れた労作で、凡百の関連出版物の白眉である。省みて筆者は折角ヤデインから直接教示を受けながら、徒らに多くの歳月を無為に過ごし、今や唯々後塵を拝するのみであることを悔いるのみである。

ともあれごく簡単に若干のコメントを付してこの項を終わることとしたい。「神殿の巻物」と言う命名は、その半分近くがエルサレムの神殿に関するものであること由来する。巻物の長さは九メートル近く、全巻物中最大である。内容はヤデインによれば中期へロテ時代を反映しており、年代はBC1CないしAD1Cの始めである。著者は多分クムラン宗団の一員であろう。この中で神は一人称で語り（モーセに対して）自らYHWHと表示する。巻物のかなりの部分がクムラン宗団独自のカレンダー（エッセネ暦）による祭日（過越祭、贖罪日、仮庵

祭等）に関わる犠牲や供物についての規定であるが、最も重要な主題はエルサレム神殿のプラン、それも出エジプト記二五章以下の幕屋についての指示に基づく詳細な規定である。極めて特徴的なことは、戦争に際しての王の身辺護衛の事と併せて段階的な兵力動員計画が定められていることである。ヤデインはこれについて一九六七年第三次中東戦争開始に当たってのイスラエル軍動員計画に酷似していることを驚きを以て述べている。彼は基本的にこの巻物を「エッセネのトラー」と見なしているのだが、没後異論も出ている。問題はこの巻物の出所であるが、4Q、11Q両説あり、ヤデインは明言を避けていたことを付記して終わりとしたい。